



春の上着 芳賀 テル子 福島

桜花にさそはれたるか老人の行方不明を知らせる公報
 よろよと杖つきあゆめば畑よりしづかにおかへりと声かけらるる
 ひと冬を湯湯婆入れて寝かせたる飼ひ犬「テリア」に十三の春
 腰まがる我に娘は買ひくるるお臂かくるる春の上着を
 五月晴れ娘につれられスパーへさつま揚げ買ふうきうきと買ふ

グジの指 印出 美由紀 神奈川

戦争を憂ひあるまにつつじ咲き巷がわつとふくらんでゐた
 春の果ていくど地球がまはつたら地下避難者の夜が明けるのか
 国旗を掲げず国歌を歌はずにナターシャ・グジはふるさとを歌ふ
 国家ではなく森や川、鳥たちやにんげんを思ひうたふのだらう
 国境なき空をあくがるる鳥のごとグジの指は弦を離れたり

鬼ごつこの鬼 羽床 員子* 神奈川

地曳綱引きし砂浜今は無くテトラポッドの山に埋もる
 こぼれ落ちる記憶集めてメモを取る今日の出来事食事のメニュー
 粗大ゴミのテーブルと椅子に挨拶す三十年間お疲れさまと
 つむじ風に渦巻く落葉を掃き寄せて又逃げられる鬼ごつこの鬼
 風が吹くたびに枯葉の舞い落ちて気付けば白樫新芽に覆わる

息子の襟足 荒川 ゆみ子 東京

窓の外君の上げてる右の手が降りないうちにバスは動いた
 もう髪を伸ばすことない 金色の木の葉のバレッタぱちんと閉じた

大野 英子選 「あすなる集」特選

本降りの雨 阿部 則子 北海道

潤ひのなくなる肌と同じこと歯へ負担ある食べ物を聞く
 四月尽エゾヤマザクラの開花なりストーブ消してかさねぎの午後
 満開の樹木に潜む気の流れふつと思ひて両手をあてる
 雀子の囀りふいに止むあとに近づく音は本降りの雨
 葬儀には来てねと言ひしかの上司(葬儀終了)を朝刊で知る

午後の庭 川端 富起子* 宮城

靴下やズボン繕う老い母にありし貧しき戦後を思う
 老い母に小遣いもらいむずがゆくゆらゆら帰るつつじ咲く径
 干し物をくぐり散歩に行く父に洗濯の札を言われる五月
 母の歌を二人で推敲する午後の庭のあやめの紫ゆれる
 好物を後から食べる小六の器にきらりイクラ三貫

馴染みない柔軟剤の香りして息子の襟足見つめてしまふ
父のもとにやうやく着けばその部屋に春の朝日が差し込んでゐた
父の好きな桃を最後に食べさせてくれた介護士渡辺さんは
水上 比呂美選

千の眼球 前中 映 東京

連翹連翹朝鮮連翹支那連翹ならんで咲いてゐる春の土手
ねぢひとつふたつはづれてゐるやうな膝にわが身を運ばせてをり
千円を寄付して思ふ千円であがなふ水の嵩パンの嵩
死ぬときに幸せならば幸せか鶏のスープで煮る豚の肉
ゆふぐれの風のさやぎに見上げれば桜花は千の眼球を持つ

二十 三 番 磯 貝 恭 子*新 潟

決心が曇らぬように菖蒲湯にひとり浸かつて菖蒲を鳴らす
人体は時に不思議なことをする身体に石を作るなんてね
初受診の総合病院おらずと我は行きたり二十三番
入口に被曝線量のポスターあり我はこれからCTを撮る
五月すえ動物病院待合は人と犬とが交互に座る

カーネーションの絵手紙 深 井 フミコ 富 山

白い雲広がり夏の雲のやう外は空気が冷たいさうです
大き鯉のおなかに小さき鯉のぼり千代紙のうるこ貼りにぎにぎし
家からの誕生日祝ひの花とどく年とつてもうれいものですね
粥食が軟飯100gに替はり家にかえる日まで一ヶ月
長女よりカーネーションの絵手紙がとどく色どりやさしき絵手紙

リベンジ 五十嵐 道 子 石 川

腰から脚痺れて歩けずデイ休みたし(這つてでも行け)子らは叱咤す
自慢する訳でなければ人一倍りハビリ励めり神よ見捨てずにあれ
足の指の腓胝が痛いよ左掌の親指撥糸指死なねば治らぬ
趣味ひとつ増える兆しかTVの北翔海莉のシャンソン講座
リベンジする漢検近づく日々なるにWOWOW観たし観る吾憎し

宇宙サバ缶 内 藤 丈 子 福 井

御食国の若狭のサバがはこばれし鯖街道は京に通ずる
ふるさとの鯖で宇宙食つくらむと研究はじめる若狭高校生
無重力での水分や味付けの開発に十四年かかりし宇宙サバ缶
若狭高の生徒つくりたるサバ缶はつひにJAXAに認定されぬ
サバ缶が宇宙を飛び若狭なる鯖街道は空へと伸びる

ちとそこまで 大 沢 律 子 岐 阜

花冷えにちとそこまでと羽織りたるカーディガン風にふふと笑みたり
紫と白のアヤメの群れ咲きて風はやさしく初夏へ誘ふ

小綾鶏の啼けは明日は雨といふトマト、胡瓜に二雨ほしい
災害禍、コロナ禍、外出自粛の世なんぢやもんぢやの白の清らか
三十八万キロも漕てといふ満月が天神山にほんのり出でます

原賀 櫻子選

二年 B 組 高 橋 みどり*愛 知

新クラス名簿に替わり訓読みの名前少なき二年B組

十度目で最後の修学旅行にはわれも生徒もマスクをつけて

「知識」「思考」「主体性」をも数値化し生徒の評価をして食べてきた
もういないひとの気配がたちのぼる コンクリートの濡れた匂いに

「T」として三十余年「P」として重き九年 さらばPTA

燕 よ 奥 永 敬 子 三重

庭に出た序でについつい草引いて汚れし爪の間束子で洗ふ

玄関の真上に巢作り初めたる燕よ納屋の入口にして

食卓のかつて六脚在りし椅子、うち二脚にて暮らしてをりぬ

足元の布団をひよいと片足で胸元に引く一人寝の技

この村に一軒在りしたばこ屋の跡地一面白詰草咲く

入 浴 成 就 石 田 信 夫*鳥 取

四カ月入浴拒否の母を連れ家族風呂にて入浴決行

「帰ろうや毎日入つとる」という母を連行のごと脱衣場に入る

われが脱ぎ心解けしか母も脱ぎ全身洗い入浴成就

脳天に辛みの刺さる葉ワサビをよしよしと燗酒かえりふくむ

「春の5K」強風黄砂寒暖差乾燥花粉に待ち人見えず

上 着 一 枚 梶 薫 子 鳥 取

浅葱から青葉色へとわが村は日を追ふごとに藍の深まる

立ち枯れてそりたつ松の木を借りて藤の花房いま盛りなり

岩肌をつたふ雫を浴びながらひつそりと咲く著我の花叢

重ね着の母にどうやら春がきて上着一枚脱ぎ捨ててゐる

高台の介護施設にむかふ道あはあは淡き卯の花の咲く

リ フ ォ ー ム 岸 下 澄 江*鳥 取

足腰の湿布をぽいと屑籠へ四月のはじめリフォーム終わる

ひよいひよいと瓦を歩く職人の赤いゴム靴春の陽受けて

熟練の大工ふたりの打つ釘のリズムのよくてテンション上がる

あれこれと迷わず捨ててリフォームへどんどん片付く私の脳は

一年生のあげた指先まっすぐに横断歩道の白線まぶし

紆 余 曲 折 樺 か 乃 広 鳥

何かしら飛び出しさうなくすの木のもこもこ視ゆる二階の窓辺

わが家の壁の汚れが見える頃坂は終はりぬ葉桜ゆるる

紆余曲折ありしと演歌聞こえてきて犬がびくびく耳立ててをり

このわれにピンクのブラウス届きたりかつて疎みし「母の日」ならむ

低く長く促すやうに届きくる沖の汽笛は母の呼ぶ声

水 上 芙 季 選

緑 雨 の あ と 松 浦 一 郎 山 口

朝光あさひの野道を行けば早起きのモンシロチョウが迎へてくれる

いちめんの水張田を吹く薫風にさざ波が立ち光をかへす

やはらかき緑雨のあとの水張田は空を写してただ静かなり

海峡を大き船ゆき金の波銀の波とをあとに残せり

いちめんの水張田のなか歩むとき弥生時代の風がそよ吹く

植 物 博 士 西 森 恭 子 高 知

ふるさとに百六十年の誕生祭植物博士の牧野富太郎

萎れたる姿みられたくないだらう鉢のビオラの花がら除く
気まぐれのやうに小雨の過ぎゆけり洗濯物を干しある庭を
幹高き古木に咲ける桐の花線引くごとく静かに落花す
茶摘みなど習ひし姑も姉も亡く訪ふ庭に赤き野葎

一等好きな人

重永栄子 福岡

夕闇に尾灯点滅しつゆゆく飛行機の中は眠りの支度か
亡き夫の丹精の椿花百余あしたに八つ夕べに六つ落つ
若き日は一等好きな人なりしグレゴリーベックの面差し忘る
七十年の時押しつけて初恋同士逢はむと言はれ踏ん切りつかぬ
昼寝より覚めてほんやり見る空は眠りの中か淡き紅色

加速してゆく

永田恵美 福岡

ああ今日はクラゲのやうな月がある眠れぬ夜のペランダの上
「紫陽花がたくさん入荷しています」花屋の黒板夏がはじまる
青空は春のみづうみ綿雲が水鳥のごと風に乗るゆく



宮里 信輝選

「その二集」特選

太陽が誘うから

清野洋子*青森

水仙のうつる川面に鴨がきてひろがる水紋ゆれる花の黄
花の名をひとつ覚えて春むかえ出会えるたびに世界がひらく

巻 き 鬚

加々良節子 佐賀

筍の先の薄切り三角の山の刺身にぬた付けて食ぶ
支へをば呉れむと来れば豌豆はすでに巻き鬚宙に泳がす
葉柄の尖の白花すでに散り十日後あたり豌豆穫りごろ
ベニカナメの新芽は芽吹き赤々と燃え立つごとく春陽に輝る
ルノアールの裸体のごとき洗ひ場の後ろ姿を浴槽で鑑る

ピンクがいい

大津 慧美子 大分

三十キロ離れしわが家に地鳴り聞く米軍訓練大砲の音
ポストから朝刊とれば広告がズシリと重し連休初日
ただ一輪咲きゐる鉄線のむらさきが風にさらはれ一片のこる
月下美人五つ開きて明るむ夜先の十年を夫と語らふ
父の日のポロシヤツの色を娘に聞かれ夫は答へり「ピンクがいい」と

木の枝にちょこんとすわり美しい声でさえずる鳥になりたい
たんぽぽに生きる理由をたずねたら「だって太陽がほら誘うから」
人住まぬ家の庭先葉の花が光を集め佇んでいる

肺を入れ替へ

藤本 都 栃木

箱根まで呶々鳥を觀に來たりけり若沖の描く陽気なる鳥を

叭々鳥は魚を見つめ下降せり水面それまで恍惚なれば
乗り越えて生きてゆかねばならぬゆゑちからを貰ふこの叭々鳥に

一袋百円の台に葱を並むフレディ・マキユリーに似たる男が
ペランダの花を植ゑ替へみづからの肺を入れ替へ明日も生きる

癌と戦ふ 吉弘藤枝 埼玉

冷たさを集めたやうな空の青癌の告知を受けて出づれば
身の中に癌あることを忘れむと心鎮めて歌詠まむとす

MRIに映し出だされし我が子宮鶏卵大の腫瘍がありぬ
振り向けば父母亡く兄亡く夫もなし老いさらばへて癌と戦ふ

腐葉土を入れて畑を耕しぬ退院叶はばトマト作らむ

葉になつた 人見江一 *神奈川

春風に舞い降りてきた花びらは閉じた詩集の葉になつた

何事も着地が大事水餃子具材と皮をピタリと決める

身体には不要な臓器の無いことを病得てみてようやく気付く

春の野に番いの蝶は求愛の互いを廻るダンス始める

明月院悟りの窓を眺めれば向こう側からも覗く人あり

オデッサ 奥浩昭 東京

マリウポリ、リヴィウ、ハルキウこれらの名三月前にはどことも知れず

オデッサに降る閃光はおびただしロシアの欲りする不凍港ゆゑ

〈ドネツク〉と〈ドネツ炭田〉高校の地理の教師に学びしその名

アフリカの後頭部なるガンビアはヘアピンを挿すごとくにも見ゆ

虹立てば市を立てたる世のありき道長邸に立つ市と虹

田中 愛子選

丸 顔 阿部直子 新潟

サバ缶の中は鯖ですがネコ缶の中は問はれドキリとしたり
この駅のアナウンスの声十余年変はずにあり きつと丸顔
青深き海をバックに自撮りする友は左手にトマトを持ってり
七十年作り来し米を兄は止め米買ふことのさみさしを言ふ
珍しと言はず変はつた色と言ひ犬のあるじの機嫌損なふ

日記 関 和新潟

豪雪もしぶしぶと消ゆ田植終へみどりの風がびゅーと癒せば
春耕に昼は農機の音ひびき暮れて立夏の蛙鳴きたつ

大切はこれから過ぐる日々なれば頭と足を鍛へんとする

ひらがなで日記をかいてるわれにして弥生今日より九十四歳

コロナ禍にかかはりなくて庭中に男の子祝ふや鯉幟泳ぐ

ムーン・リバー 清水 由美子 *長野

常緑と若い緑がせめぎ合い春のうねりに充ちる里山

球場のアナウンスの声風にのり開いた五月の窓に届きぬ

子育てや勤めを終えて夢だったチェロ始めたる人ら嬉しげ

どの人も日々の充実口にする大人のチェロの発表会では

28本のチェロの全体合奏のムーン・リバーは豊かに流る

春の哀しみ 池田 あつ子 愛知

ゆく春を惜しみていよよ咲き満つる鬱金桜のやはらかき白

咲き満つる樹下に亡き夫呼び出さむ私のなかのさくら記念日
浮き浮きと桜の着物纏ひしは春の哀しみまだ知らぬころ
草を抜く母の背なかに桜降りデイサービスはもういやと言ふ
木犀の若葉の先ゆ雨粒のしたたる間合ひに息をしてをり

調味料流しの下の暗がりて整然として出番を待てり
脳内の再生やまずあのときの会釈はあれでよかつたのかと
ブルタブをひく音がする最終の新快速の車窓は暗い
日曜の午後の家族はそれぞれにちがう画面に静かに見入る
蛇行する蝶の行方はあきらめて郵便局へ自転車漕ぐ

小島 ゆかり選

好きだったロシア 土山 純 子*兵庫 庫

エビネランの役目終えたる古葉切れば新葉新芽の勢う四月
ゆつくりと完熟トマトを煮つめゆく時間のクツクツソースになりぬ
シンブルに生きるつもりが我が暮し雑用多く今日も終わりぬ
バラ柄のブラウスを着てバラ園に行けば気持ちは甘く華やぐ
トロイカヤカチューシャ唄い踊った日好きだったロシア今はいずこに

月光の曲 三好紀子 山口

真夜中の雷雨がやみて穏しきに瀬戸に滅びし平家を思ふ
くれなゐに柘榴の咲ける屋敷跡ねこそぎ更地になりて寂し

北浦の漁港は山を背に開けいか釣船の停泊しをり
爽やかな朝来たりてのどぐろの開きを一枚買ひ求めたり
一生を振り返ることくゆつたりと月光の曲を弾き始めたり

バイクの若者 鈴木 喜代子*愛媛

大潮の干潟に数羽さぎの居て抜き足差し足妙技を見せる
倒木の空に逃げ込み赤きつめ見せて動かぬさわがに親子
鏡台に残りし夫の香水をつければ風があなたを連れ来
トランペット流れる加茂の川床でひとときわ高くひばり囀る
礼儀良くバイクの若者合図して薫風の中泳ぐがに過ぐ

目玉焼 石本 洋子 佐賀

早起きの夫が作りし目玉焼残る片目がわれを待ちをり
黙々と炊くこと掃くこと洗ふこと些事にてあれど生きゐる証
家出でし男孫の部屋に鴨居よりだらりと下がるズボンのベルト
復元の「黄金の茶室」観てからは秀吉様を好きになれない
新聞の「無情の大雪」なる記事は「詩情の雪」の思ひを碎く

C M 競争 牧島 幸造 鹿児島

飲み会に悪酔ひせぬやう亡き母は卵を割つて差し出しくれき
卵殻を内と外から突き破る誕生の神秘目の当たり見る
つひに出た小百合ちゃんまで飲み出したビール会社のCM競争
子や孫が帰省と聞けば爺婆は元氣を出して大掃除する
二年振り帰省の孫の歓迎に好みも聞かずし寿司盛り取り寄す